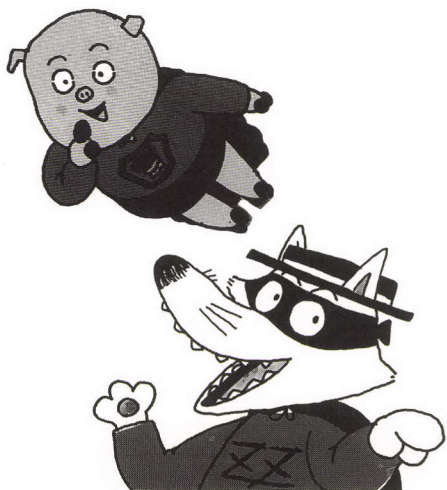
ポプラ社の小さな童話 ⑱
《ほうれんそうマンシリーズ》

おばけ

がいこく

- ●へんし〜んほうれんそうマン
- ●ほうれんそうマンよいこの１年生
- ●ほうれんそうマンのおばけやしき
- ●ほうれんそうマンのじどうしゃレース
- ●ほうれんそうマンのようかいじま
- ●ほうれんそうマンのようかいがっこう
- ●ほうれんそうマンのゆうれいじょう
- ●かいけつゾロリのドラゴンたいじ
- ●かいけつゾロリのきょうふのやかた
- ●かいけつゾロリのまほうつかいのでし
- ●かいけつゾロリの大かいぞく
- ●かいけつゾロリのゆうれいせん
- ●かいけつゾロリのチョコレートじょう
- ●かいけつゾロリの大きょうりゅう
- ●かいけつゾロリのきょうふのゆうえんち
- ●かいけつゾロリのママだ〜いすき
- ●かいけつゾロリの大かいじゅう
- ●かいけつゾロリのなぞのうちゅうじん
- ●かいけつゾロリのきょうふのプレゼント
- ●かいけつゾロリのなぞなぞ大さくせん
- ●かいけつゾロリのきょうふのサッカー
- ●かいけつゾロリつかまる!!
- ●かいけつゾロリとなぞのひこうき
- ●かいけつゾロリのおばけ大さくせん
- ●かいけつゾロリのにんじゃ大さくせん
- ●かいけつゾロリけっこんする!?
- ●かいけつゾロリ大けっとう！ゾロリじょう
- ●かいけつゾロリのきょうふのカーレース
- ●かいけつゾロリのきょうふの大ジャンプ
- ●かいけつゾロリの大金もち
- ●かいけつゾロリのテレビゲームききいっぱつ
- ●かいけつゾロリのきょうふの宝さがし
- ●かいけつゾロリちきゅうさいごの日

ポプラ社の小さな童話㊳

ほうれんそうマンのおばけやしき

一九八五年 七 月 第1刷
二〇〇三年 八 月 第46刷

作 家 みづしま志穂
画 家 原 ゆたか
発行者 坂井宏先
発行所 株式会社 **ポプラ社**
東京都新宿区須賀町五 〒一六〇-八五六五
TEL 〇三-三三五七-二二一六(編集)
〇三-三三五七-二二一三(営業)
〇三-三三五七-二二一一(受注センター)
FAX 〇三-三三五九-二三五九(ご注文)
振替 〇〇一四〇-三-一四九二七一
印 刷 瞬報社写真印刷株式会社
製 本 株式会社難波製本

ISBN4-591-02021-5

●作家紹介

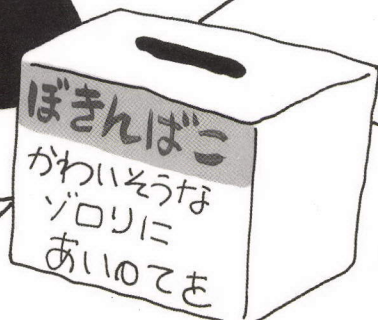
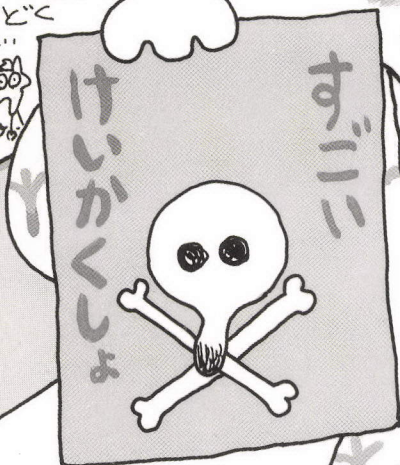
みづしま志穂（みづしましほ）

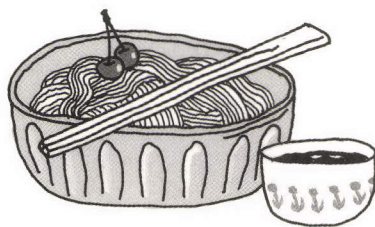
一九五二年、鹿児島県に生まれる。「つよいぞポイポイきみはヒーロー」で第七回毎日童話新人賞「好きだった風　風だったきみ」で第三十二回毎日児童小説賞・日本児童文学者協会新人賞を受賞する。作品に「ほうれんそうマン」シリーズなどがある。

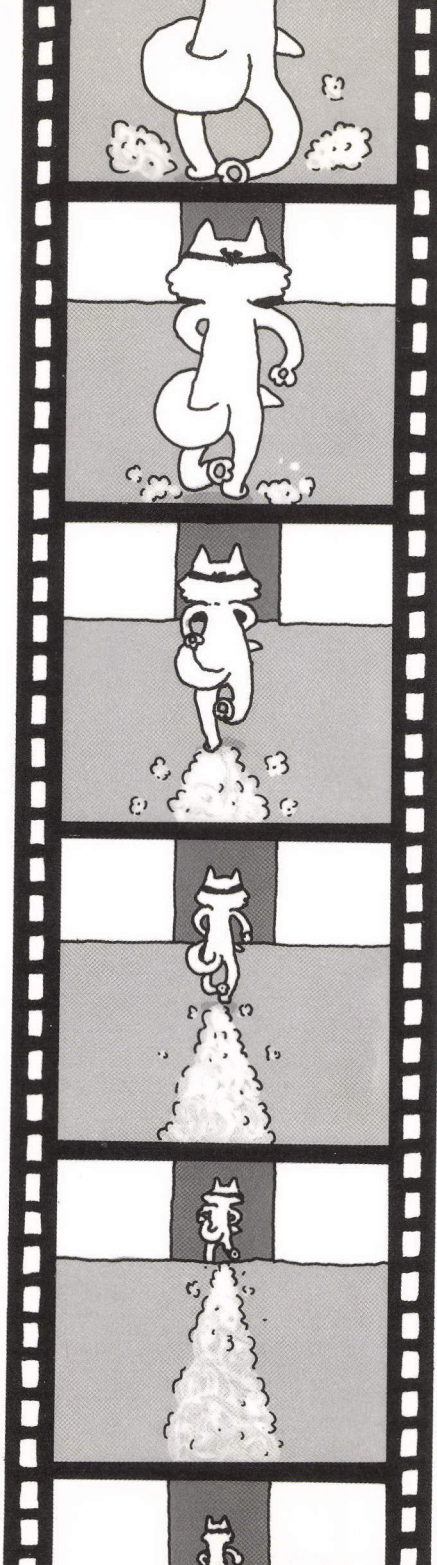
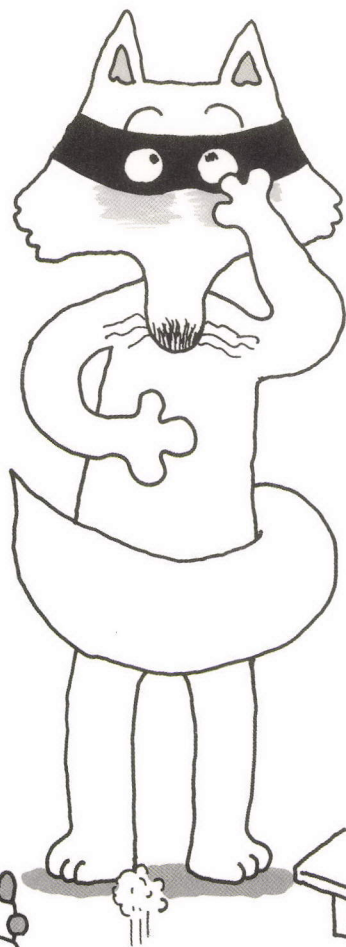
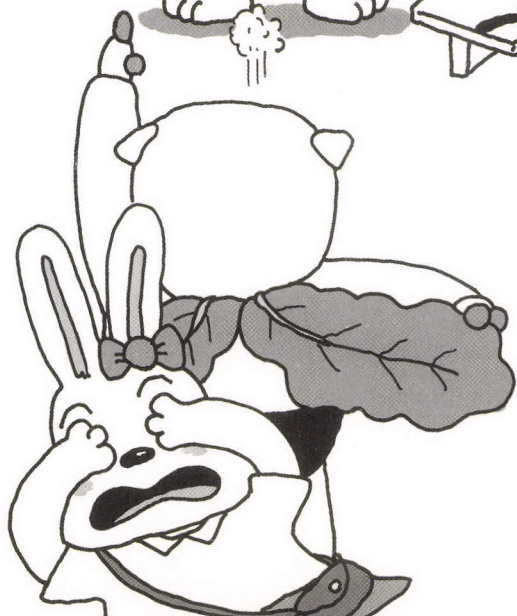
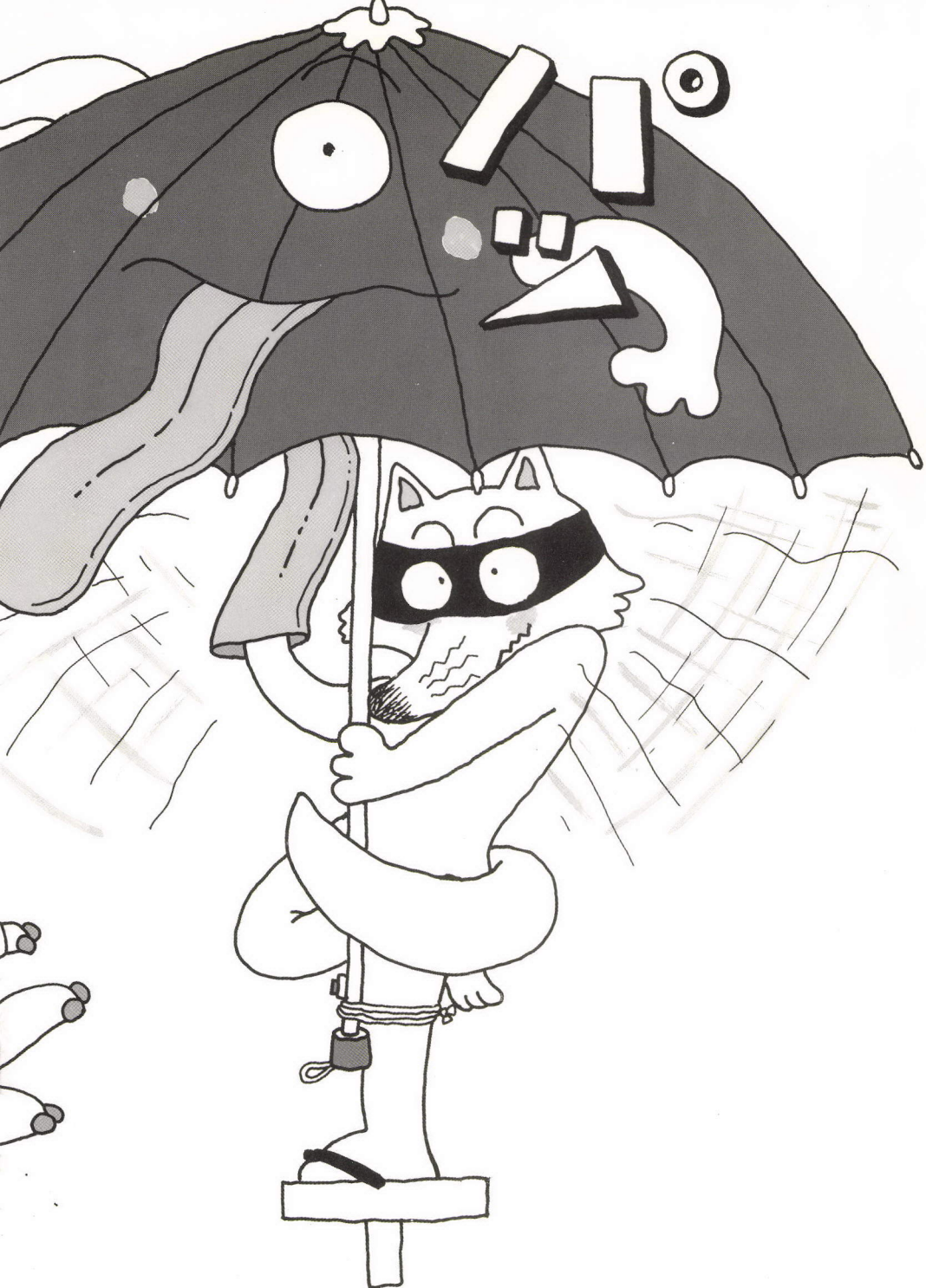
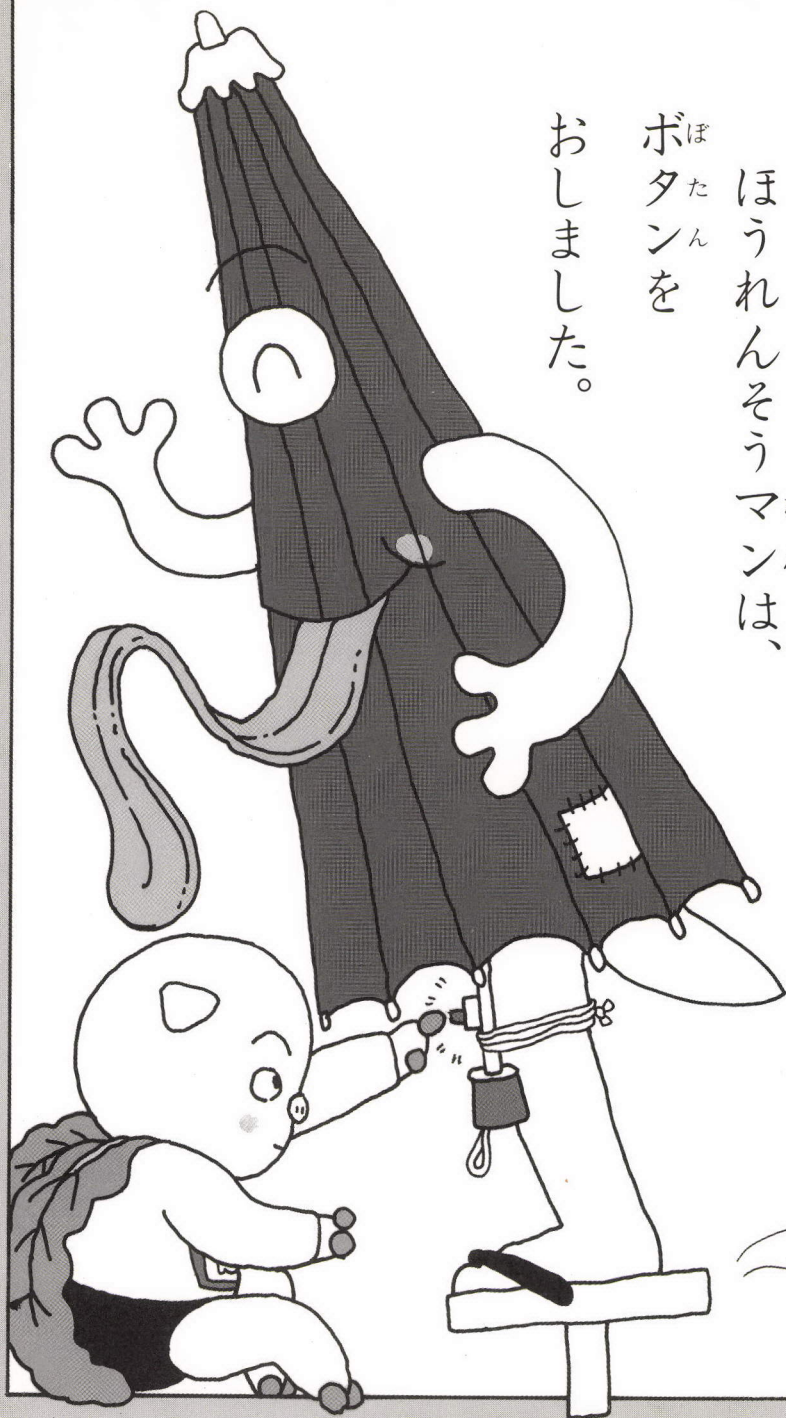
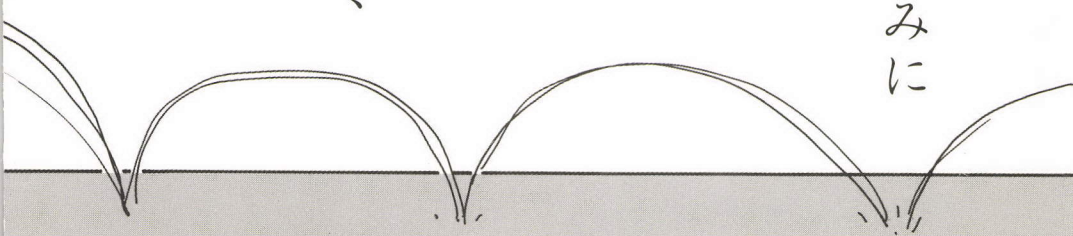
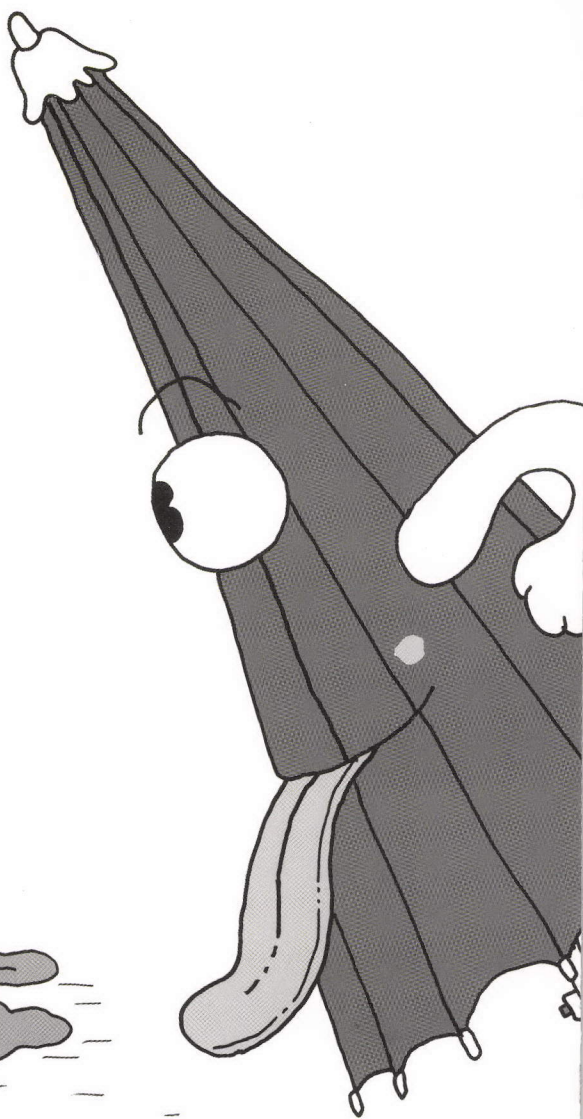
●画家紹介

原ゆたか（はらゆたか）

一九五三年、熊本県に生まれる。七四年KFSコンテスト・講談社児童図書部門賞受賞。主な作品に、「ちいさなもり」「マータンはまさおくん」「てぶくろロケットの宇宙探険」「たからのげた」「ぷうのおつかい」「ぼくのもパパみたいになるのかな」「ほうれんそうマン」シリーズなどがある。

おばけやしき セット
大バーゲン
☆ばしょ ゾロリじょう
◎ゆきおんな ロボット
10まんえん が
なんと 1まんえん
◎3くろっくび
ぬいぐるみ
5まんえんが
2まんえ
おかいどく
まあ やすい
ポイポイなんか
かきごおりで
おなかこわしちゃえ
すごい
けいかくしょ
ぼきんばこ
かわいそうな
ゾロリに
おいのてき

よんでくれたとおり、
ほうれんそうマンの　おかげで、
ゾロリじょうは　めちゃくちゃだ。
こんどの　けいかくは　すごいから、
みんなも　かわいそうな
この　ゾロリさまの　みかたに
なるんだぞ。　わかったな。

「ほうれんそうマン、たすけてくれて　ありがとう。」
すみれちゃんは、おもわず　ほうれんそうマンの
まんまるい　ほっぺたに、チュッ　しました。
それが、左の　きねんしゃしんです。
それから、シマオと　ポンチを　たすけだし、
みんなで、おなかいっぱい　そうめんと、
かきごおりを、たべました。
「ゾロリさん　ごちそうさまーっ。」

ゾロリは、しっぽで　まえを　かくしながら、
ビューッと、すなけむりのように　目にも　とまらぬ
はやさで、にげていきました。

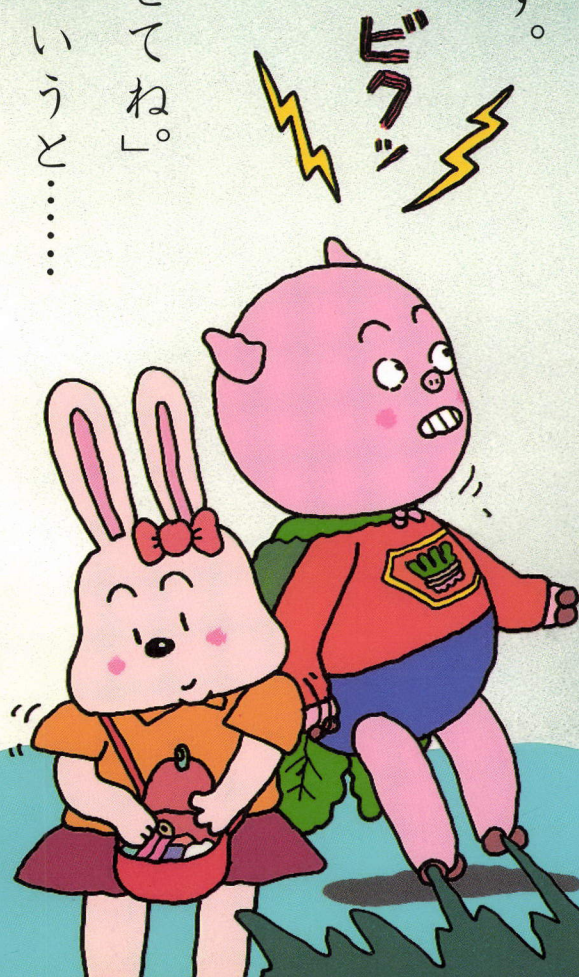
「おぼえてろよー、ほうれんそうマン。」

「すみれちゃんが　いると　いうのに、
エチケット（えちけっと）いはんだぞ。
パンツ（ぱんつ）ぐらい、　はいておけ。」

「ひえ――っ。」

ワンタッチで、かさが　ひらきました。
からかさの　しょうたいは、ワンタッチの
こうもりがさだったのです。
「あれー、ママー、はずかしいよー。」
なんと、かいけつ　ゾロリは、つぎから　つぎへと、
おばけの　いしょうを　きがえるのに
いそがしく、はだかんぼだったのでした。

ほうれんそうマンは、
ボタンを
おしました。

とうとう、ほうれんそうマンは、へやの　すみに
おいこまれてしまいました。
べろべろべろと　した　したが、
ぬ――っと、のびてきました。
「うへーっ、きもちわるーい！」
そのときです。
ほうれんそうマンは、かさの　えのところに、
ボタンを　みつけました。
「これだ!!」

でも、おばけは　しつこく
おいかけてきます。
なんて、きもちの　わるい
おばけでしょう。

一本足(いっぽんあし)で　ひとつ目(め)の、からかさ
おばけが　とびだしてきました。
ピョン　ピョン　ピョンと、
ジャンプ　しながら、したを　べろべろと
だしては、ほうれんそうマンを
なめまくります。
「うわっ　きたないやつ。」
こんどばかりは、ほうれんそうマンも
にげだしました。

「チエッ、かわいいだって？ くそ、おぼえていろよ。」
のっぺらぼうは、らんぼうに いうと、はしって
にげていきました。白い きものの あいだから、
ちらっと しっぽが みえました。
「うぬぬ、あの しっぽは、やっぱり かいけつ ゾロリ。」
ほうれんそうマンは、ピンクの かおを、ますます
ピンクに して、
「まて――。」
と、さけんで、おいかけていきます。すると……

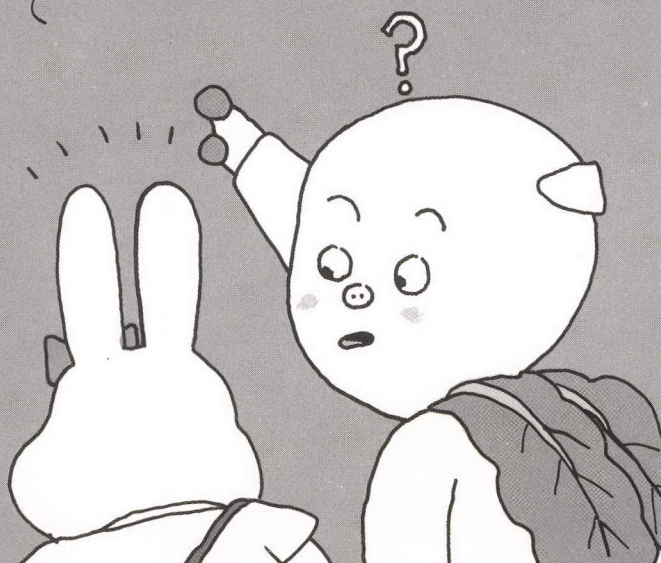
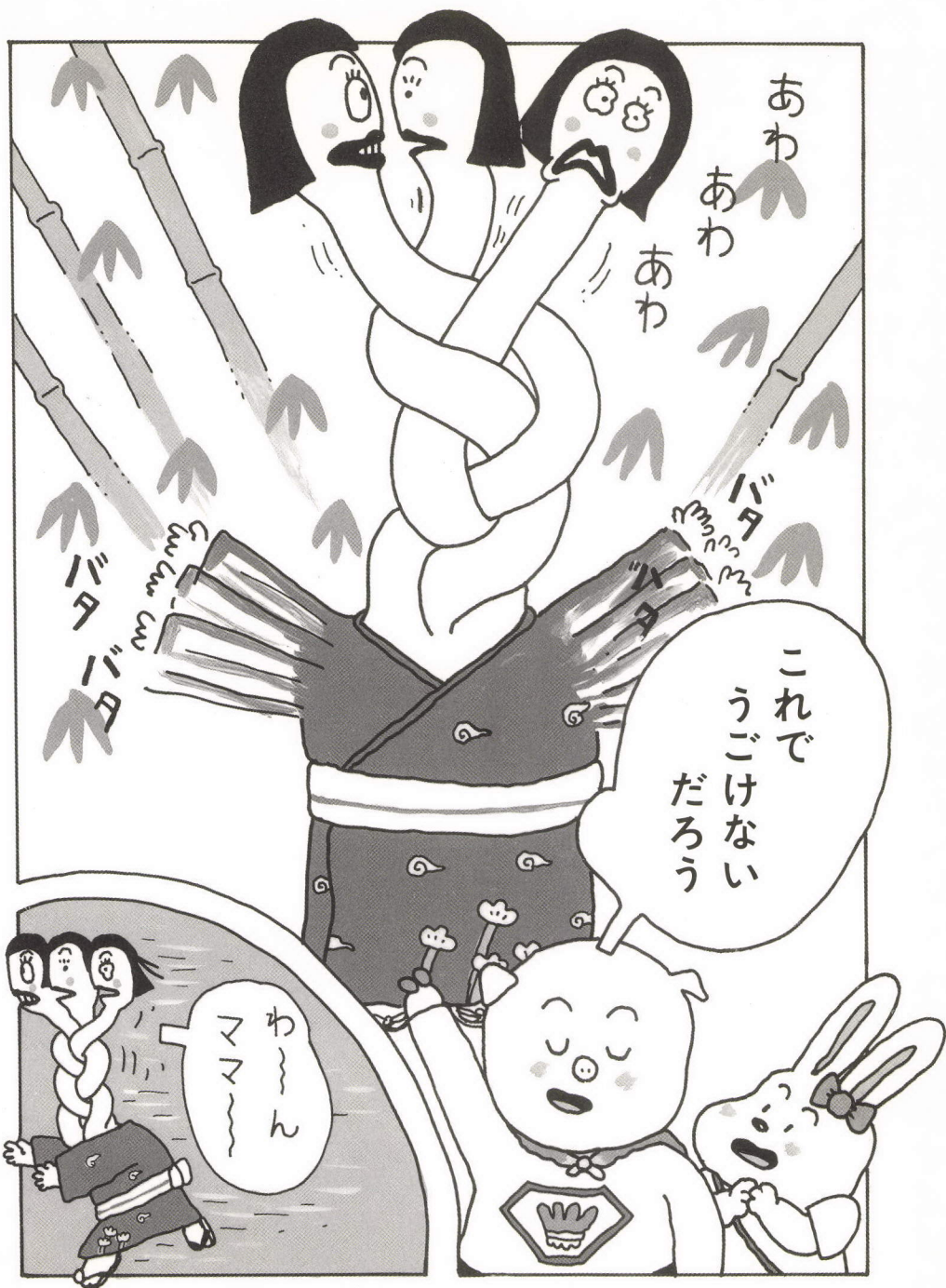
ウフフ、かわいいなあ。
すみれちゃんて、
えが　うまいんだね。

「がいこつと　とかげの　しっぽで、だしを　とった
おばけラーメンは、いらんかね〜〜。」
と　いうなり、さっと　ふりむきました。
のっぺらぼうです。

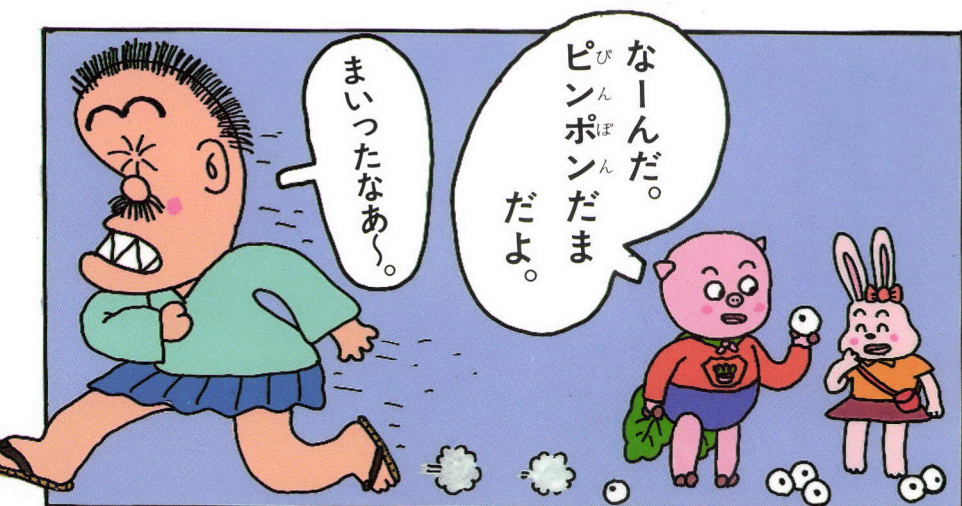
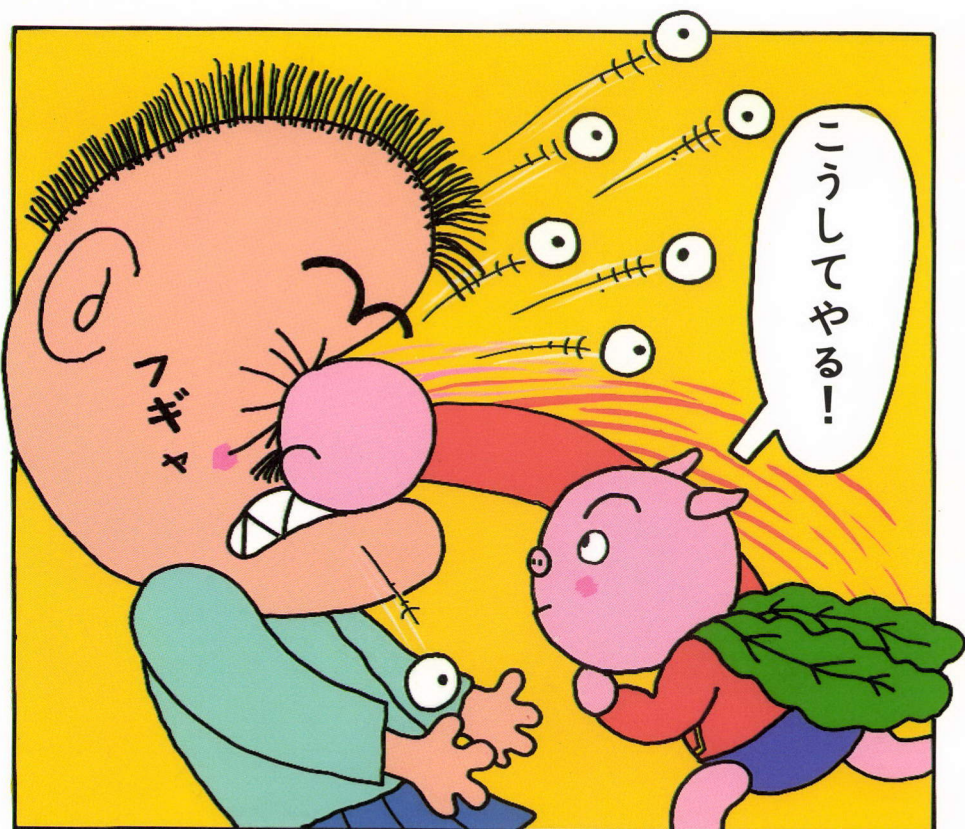
ビクッ

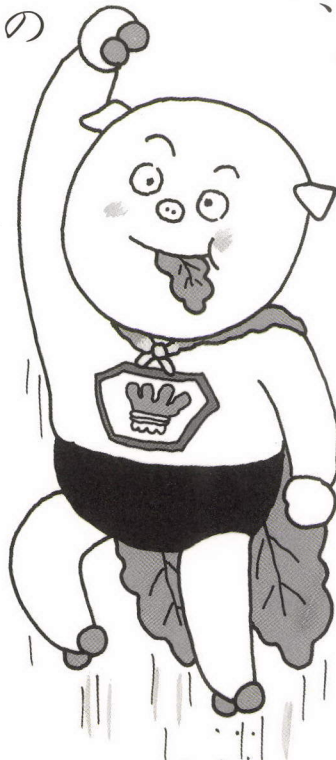
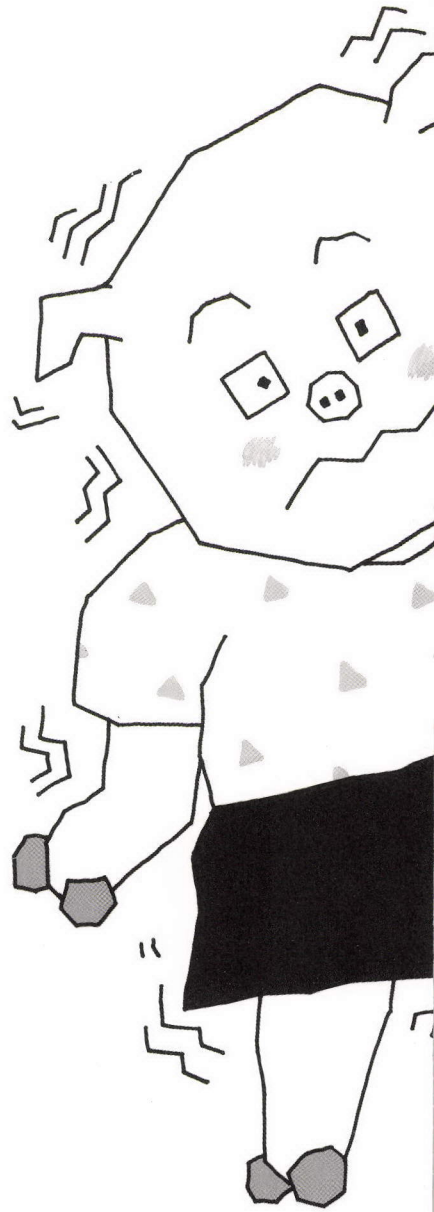
「こんどは
わたしに　まかせてね。」
すみれちゃんは　いうと……

クルリ・ン

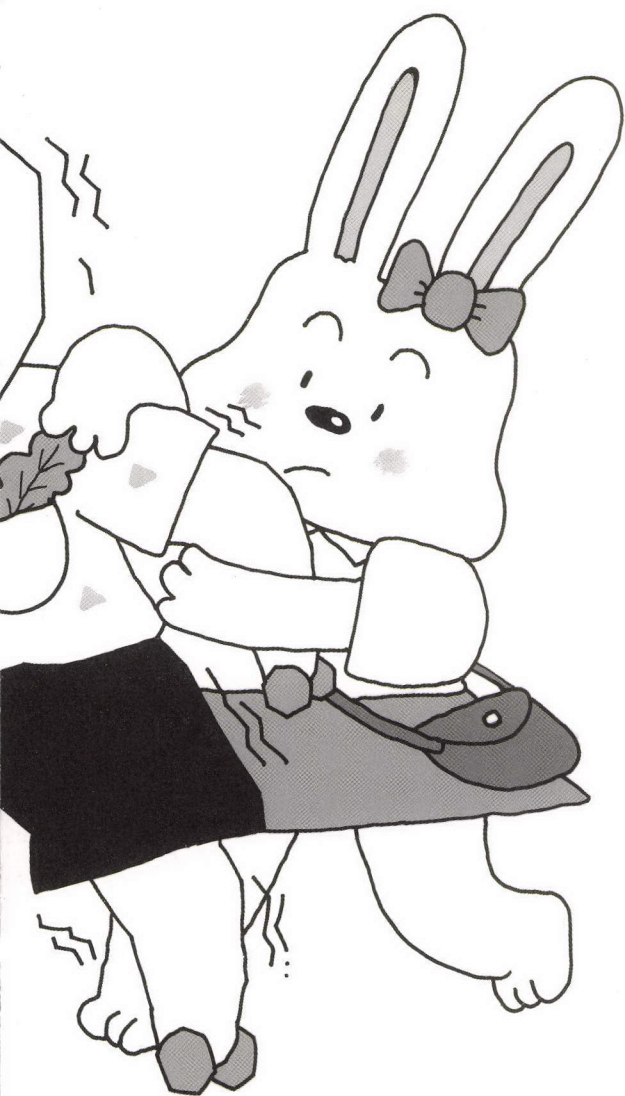
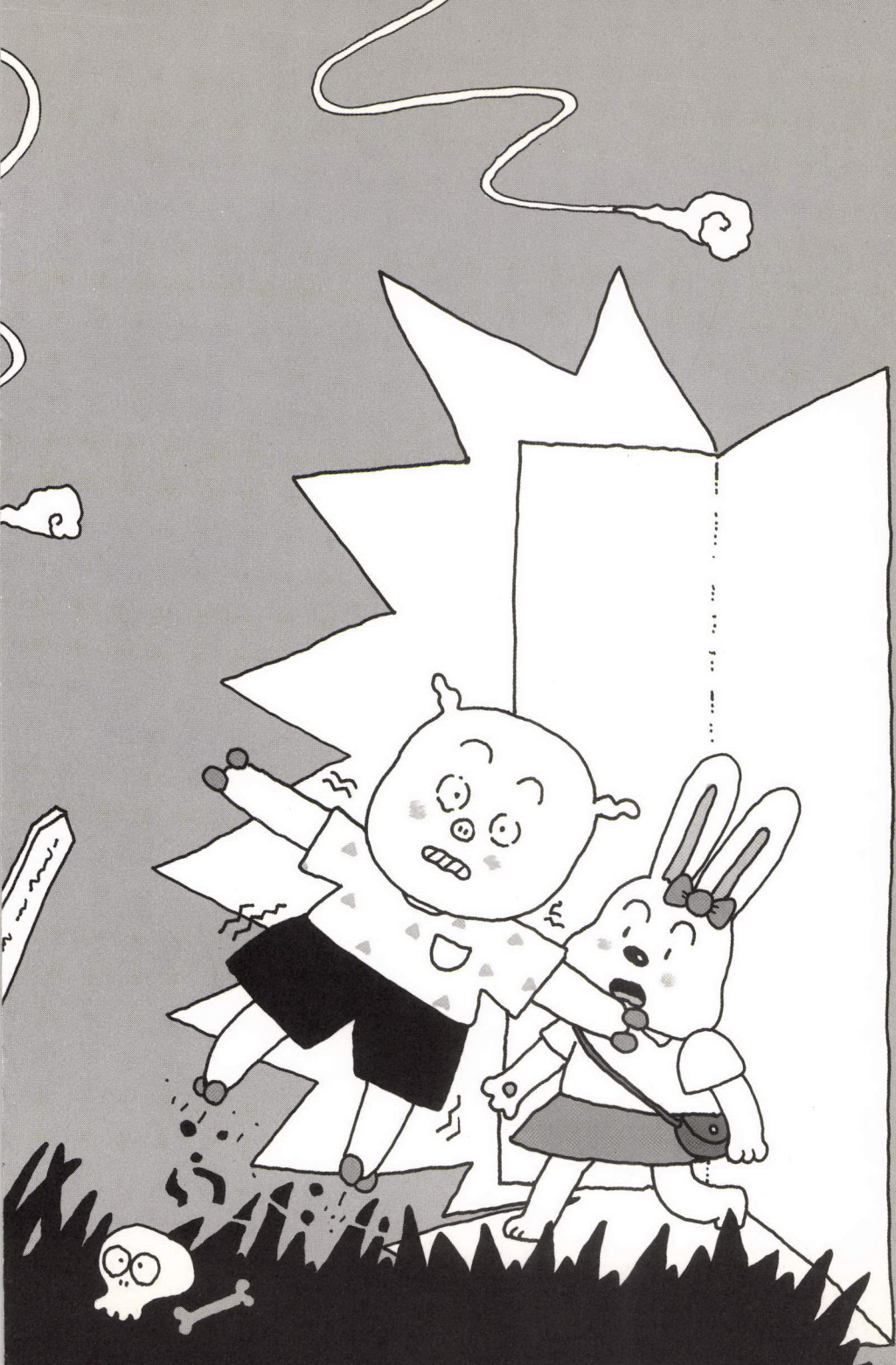
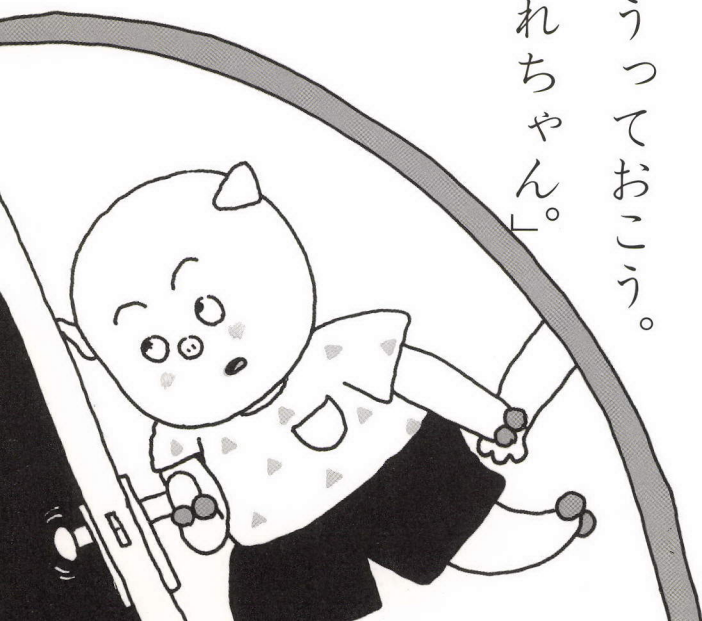
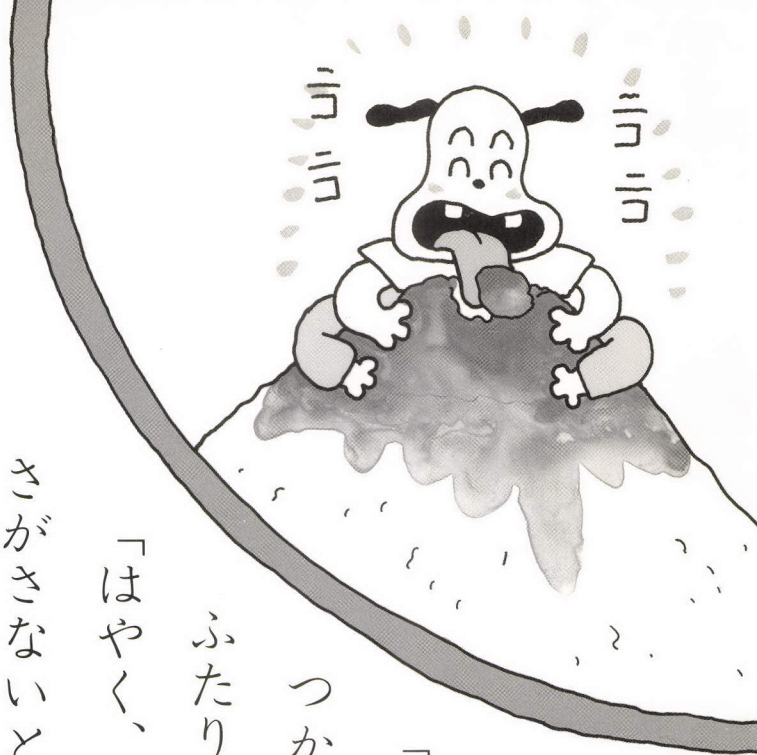
「なんだろう、　あれは……。」
むこうに、　ちらちら　あかりが
みえます。
かみのけの　ながい　女のひとが、
なべを　かきまわしています。
「もしもし、　なにを　して
いるのですか？」
ほうれんそうマンが、　れいぎ
ただしく　ききますと……

あわ
あわ
あわ
バタ
バタ
これで
うごけない
だろう
バタ
バタ
わ〜ん
ママ〜〜

なおも すすんでいくと、やぶのなかから、
ニューッと、ろくろっくびが あらわれました。
それも 三本くびの ろくろっくびです。
「うらめしや〜〜。」

こうしてやる！
フギャ

なーんだ。ピンポンだまだよ。
まいったなあ〜。

すみれちゃんと　しっかり　手を
つないで　すすんでいくと、
いきなり、七つ目こぞうが
とびだしてきました。

ジャジャジャジャーン！
ピンクの　おかお、みどりの　マントの
ほうれんそうマンに、
へんしん
していました。
ゆうきが　たいこの
おとのように、ドン　ドン　ドン　ドンと、
もりあがってきます。
「よーし、さあ　いくぞっ。」

「こ、こ、こわくて、からだが　うごかない。
ぼ、ぼ、ぼくの　ポケットから、
ほ、ほ、ほうれんそうを　だして、たべさせてくれ。」
すみれちゃんが、ほうれんそうを　ポイポイに
たべさせますと……

なまあたたかい　かぜが、ゾワ　ゾワ～ッ。
「ポイポイ、なにを　かちんかちんに
つっぱってるの？」

ひとだまが　とんでいます。
ここは、ほんものの　おばけやしきです。
ゾロリが　わるぢえを　ふりしぼって
かんがえた、きょうふの　へやです。
「ポイポイ、いきては　でられぬ、こわーい
おばけやしきだ。こわくて　おもらし
しないように、きをつけろよ～。」
ゾロリの　声が、ほそーく　なって、
きえていきました。

「わーい　わい、かきごおりだっ。」
と　いうと、うじきんときの　山に　のぼって、
たべはじめました。
「しかたが　ない。イヌジは、ほうっておこう。
ふたりだけだけど、いいね、すみれちゃん。」
「ええ、ポイポイ。」
ポイポイと　すみれちゃんは、
かくごを　きめて、つぎの
ドアを　あけました。

「ふぶきで　目が
みえないわ。」
「すみれちゃん、ぼくに
つかまって。」
ふたりは、よろよろと　すすみます。
「はやく、つぎの　ドアを
さがさないと、こごえしんでしまうぞ。」
ところが、エスキモー犬の　ちを　ひく　イヌジは、
さむさに　つよく、

☆かきごおりの きかいと
じてんしゃで つくった
かきごおり じごく マシーン。
ペダルを ふんで かきごおりを
つくり、せんぷうきで
とばすのだ。
☆したが まっかになる
こおり いちごの やま
☆したが
みどりになる
こおりメロンの
やま
せんぷうき
こおり
ビュルル
ふうそく 100メートル
☆からだは、ドライアイスで
できている。
さわると、手がペタリと くっついて
はなれなく なるぞ

きみだけに おしえよう

きょうふの かきごおり じごくの ぶたいうらは これだ!!

☆アイスクリームのもり
木のみきに ゾロリ・マークが かいてあると もう 1本 たべなくては いけない

☆うじきんときのやま
あずきがでてくるまで たべると おなかを こわすぞ

5メートル

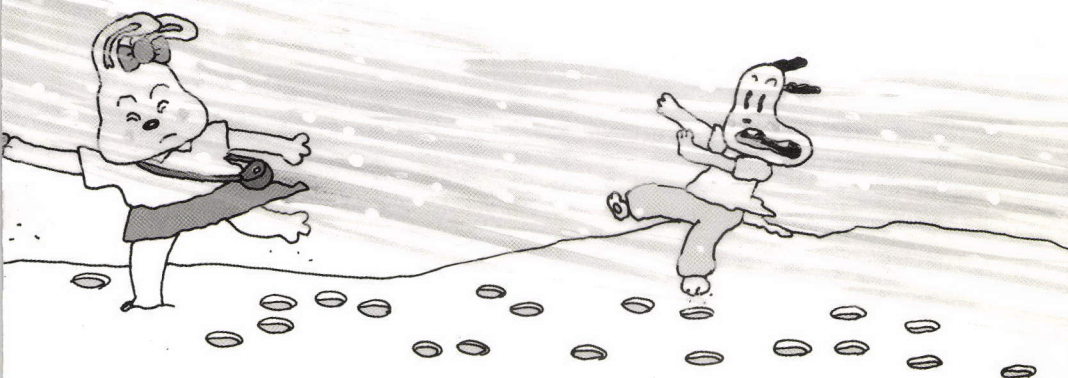
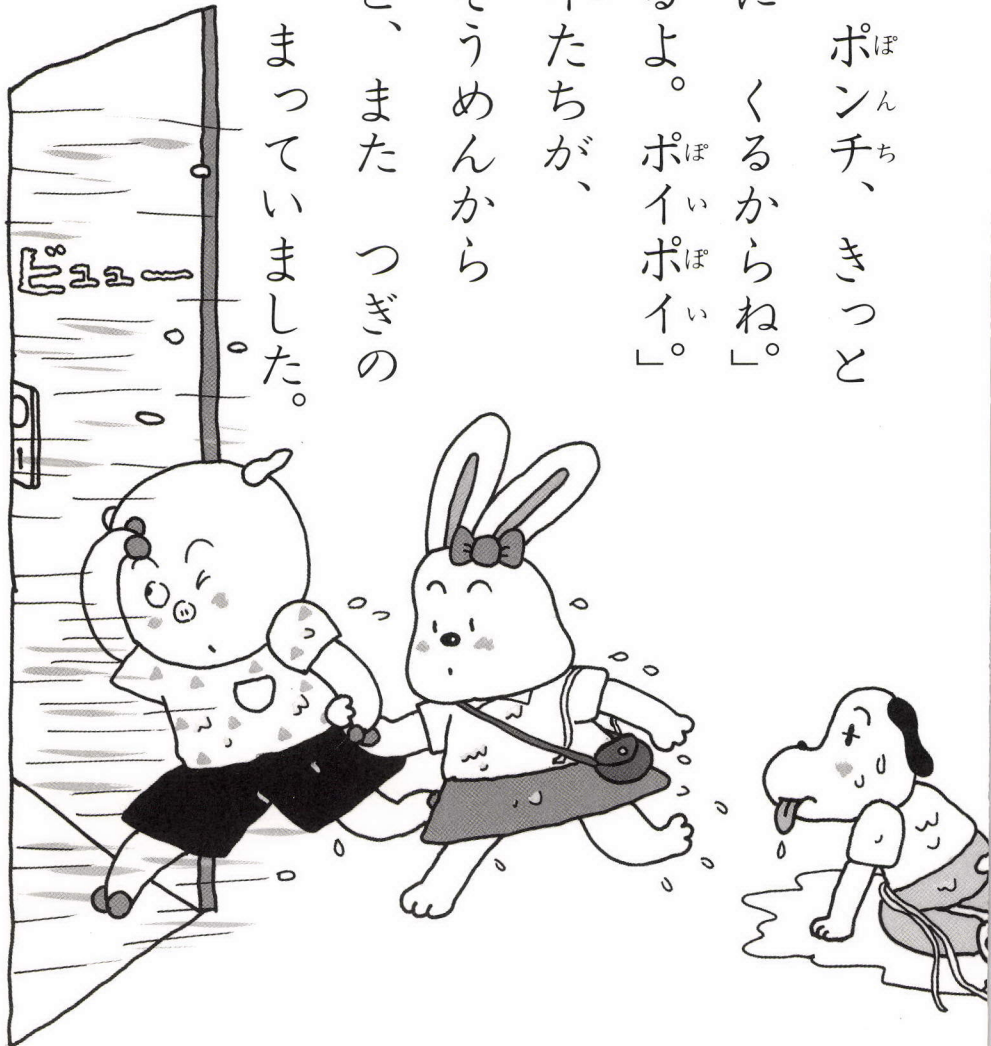
あずき

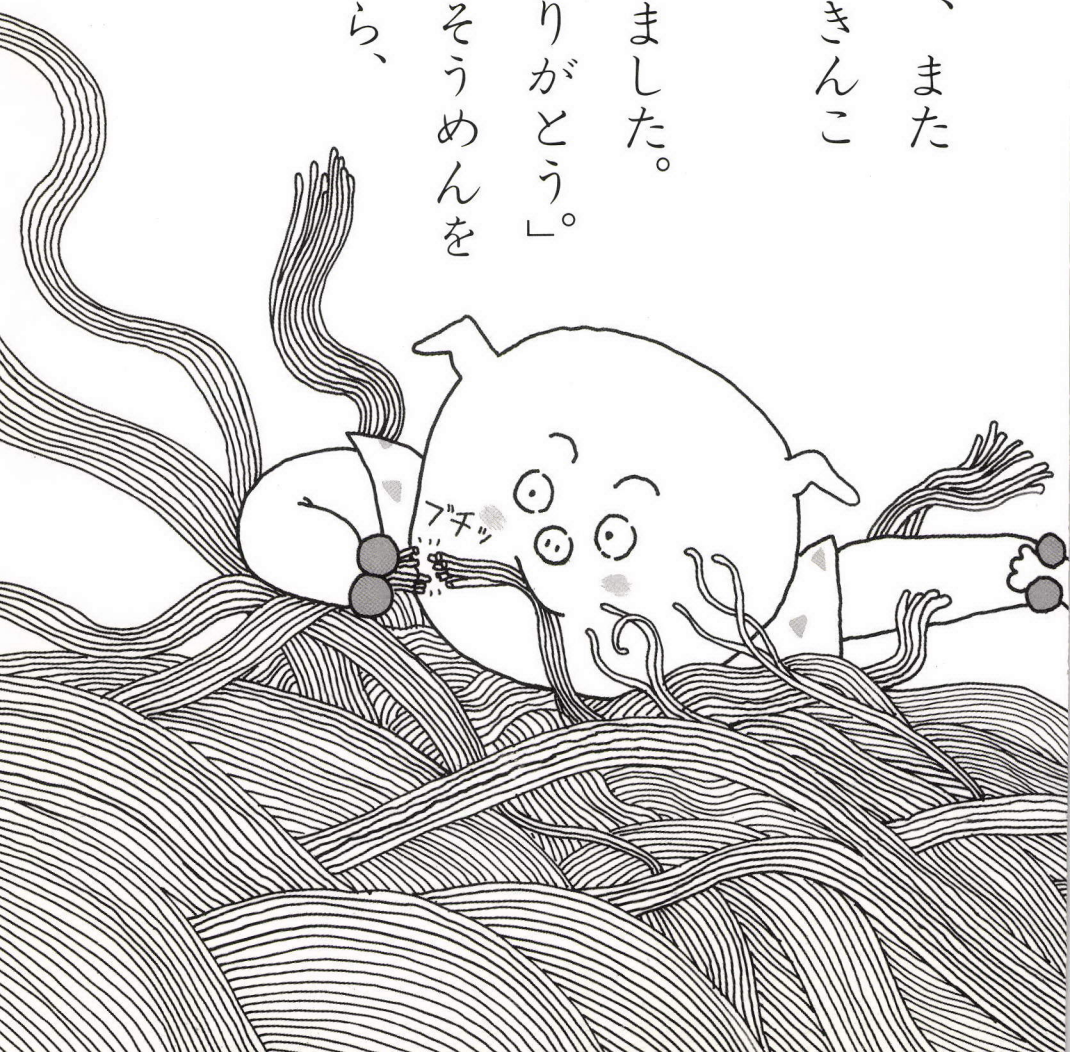
ミルク

☆たべすぎると あたまが キーンと いたくなる シャーベットのやま

☆ソフトクリームのはやし
なめだすと やめられなく なるから きをつけて

シャーベット、うじきんときの
山も　あります。
「どうだ。これが、〝かきごおり　じごく〟だ!!
さあ、ゾロリさまの　こおりふぶきを、
たっぷり　くらえ。」
ゾロリは、ゆきおんなの　ロボットに
とびのると、ぶんぶんと　こぎはじめました。

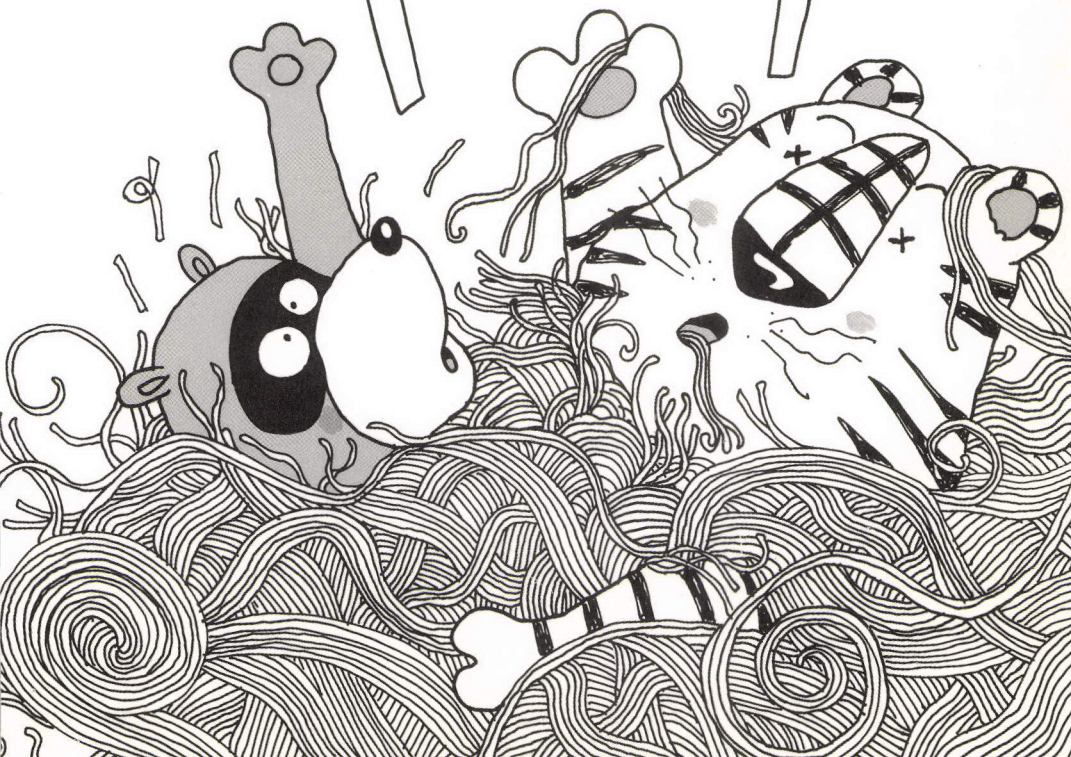
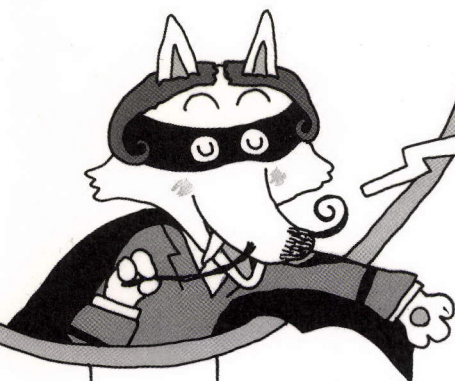
ドアを　あけると、
ビュー　ビュユ――ユ――
なんきょくのような
さむさです。
ここは、かきごおりの山　また　山。
「ぶるぶるるーっ、つめたい。
さ、さむいよー。こごえちゃうー。」
ふぶきが　ふきつけます。
メロンに　イチゴに

「シマオ、ポンチ、きっと
たすけに　くるからね。」
「まってるよ。ポイポイ。」
ポイポイたちが、
やっと　そうめんから
ぬけだすと、また　つぎの
じごくが、まっていました。

イヌジも　いぬかきで
ついてきます。
でも　たいじゅうの
おもい　シマオと、
およげない　ポンチは、
そうめんの池
じごくへ、
とりのこされて
しまいました。

おもったとたん、また
ゆうきが、どっきんこ
どっきんこと、
もりあがってきました。
「ポイポイ　ありがとう。」
ポイポイは　そうめんを
ぶっちぎりながら、
ぐいぐい
すすみました。

なんと　いうか、やっぱり　というか、
ドラチュッチュの　しょうたいは、
かいけつ　ゾロリだったのです。
すみれちゃんは、そうめんの　うずのなかに
のみこまれようと　しています。
「あっ、すみれちゃん　がんばれ。
ぼくの　手に　つかまって。」
ポイポイは、すみれちゃんを
たすけなければ　いけないと

みんなの　くるしむ　ようすを　みて、
ドラチュッチュは、おなかを　かかえて
わらいころげました。

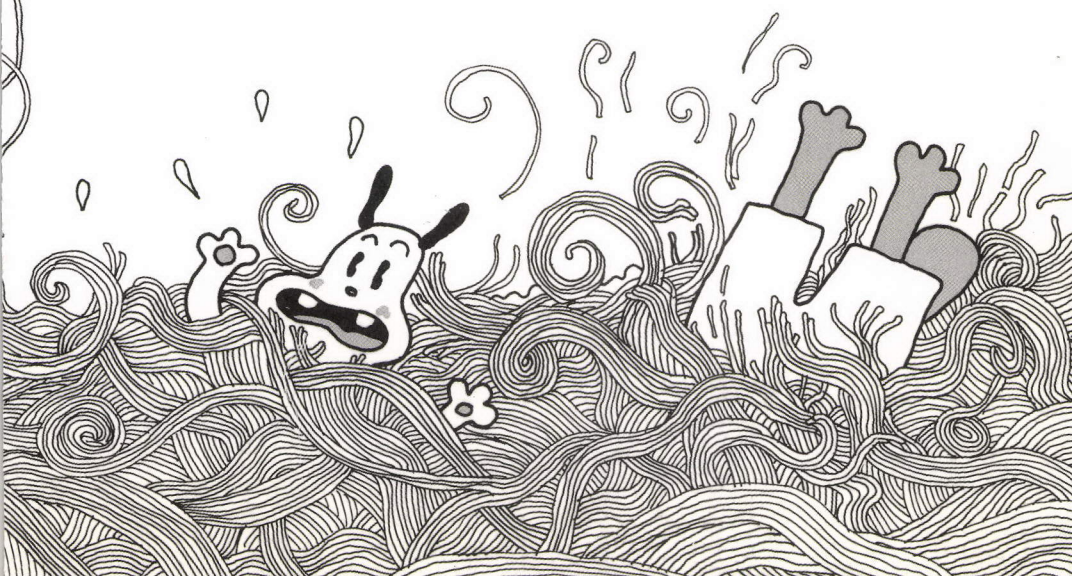
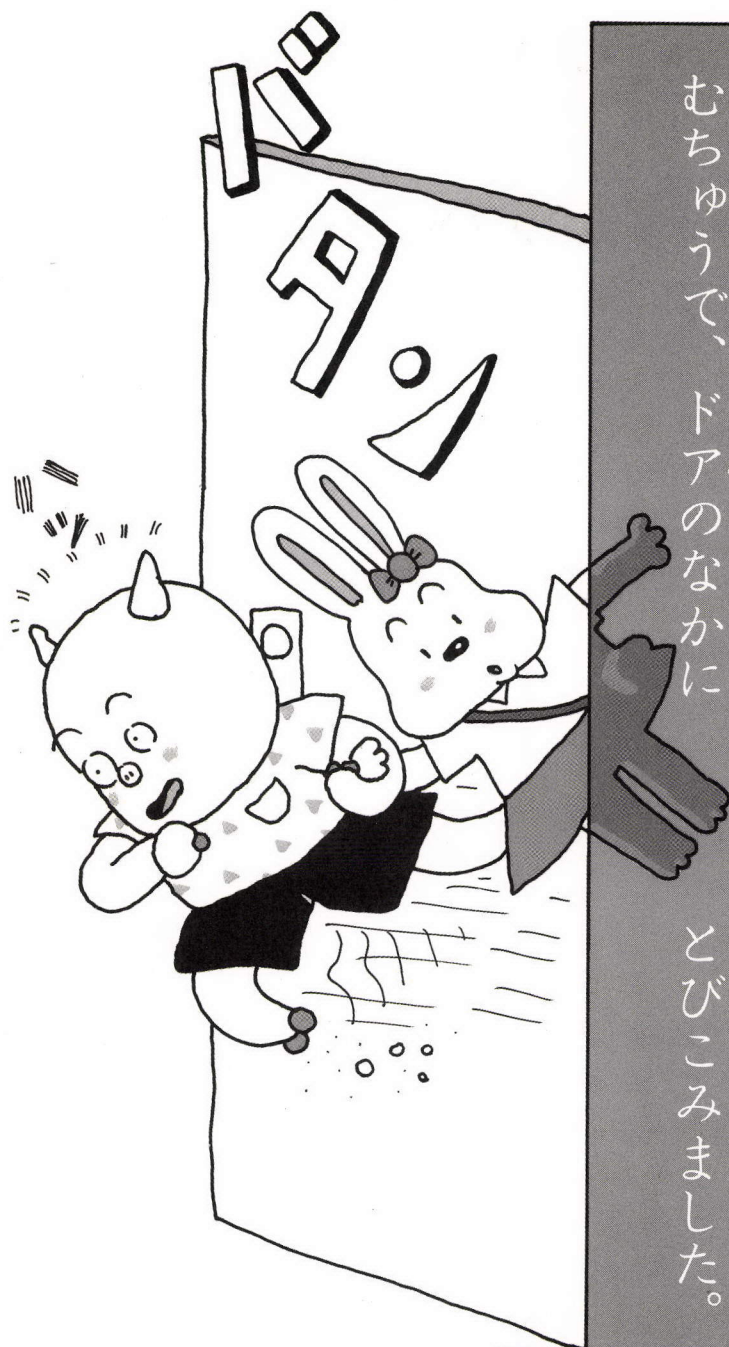
「くろうして、そうめんを　ゆでまくった
かいが　あったぜ。
ウワッハッハ、ヒッヒッヒッヒ。」

あんまり　わらいすぎて、
きばが、ぽろっと
おちました。

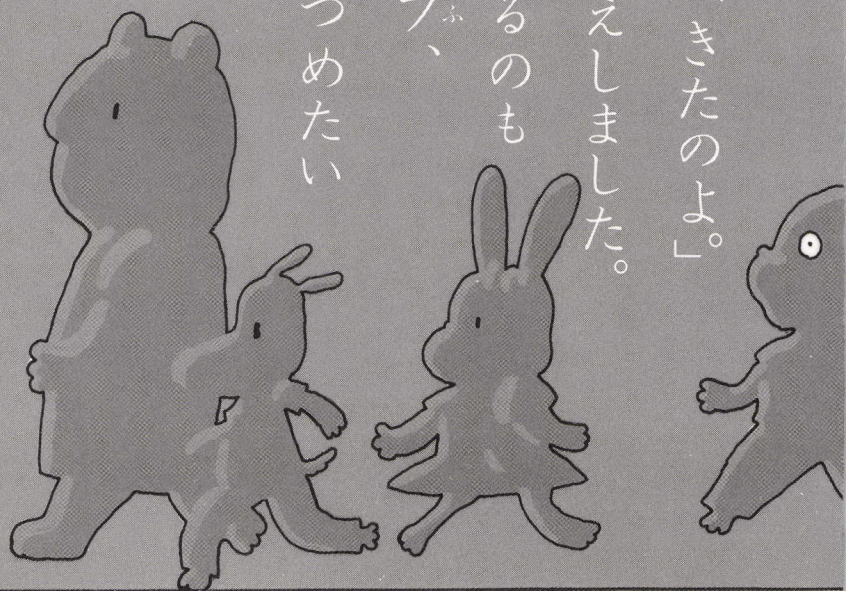
そうめんが　足(あし)に
からみついて、
そこなしぬまのようだっ。
うまく　およげないっ！
うずに
まきこまれる――！
ぼく
およげないんだ。

わたしが ひとりで
かんがえたのよ。
みんな、そんけい
してね。
そうめんの つゆ
3ばいに
うすめてね
みず
つゆが
からすぎたら
みずで
うすめよう
•この こおりが
ぶつかると
いたいぞ
•さくらんぼは
ぶつかっても
あまり いたくない。
たべたら ちゃんと
たねは だしてね。
ねぎ
しょうが
✿せんたくきから
とりはずした
スクリューで
そうめんの うずき
まき おこす。

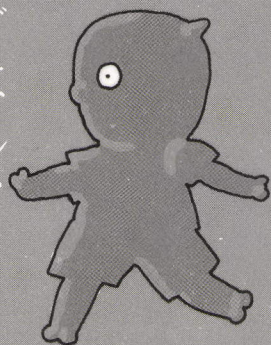
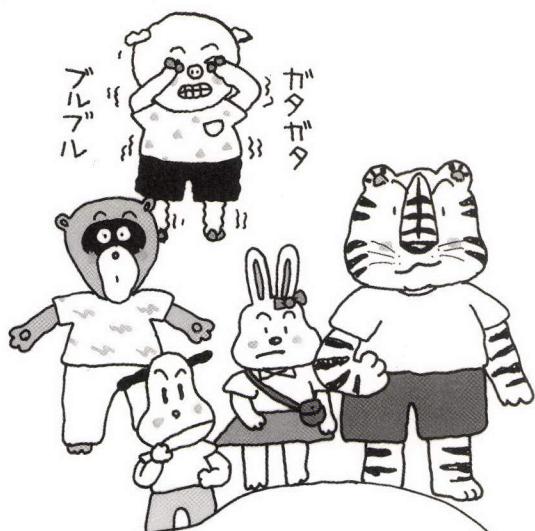
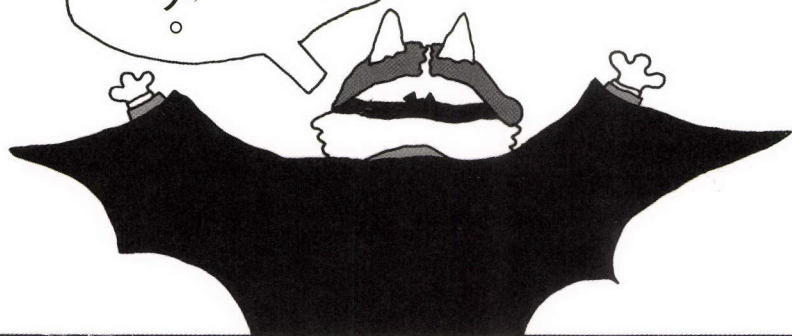
これが
そうめんの池 じごくの
ひみつだ !!
ゾロリが 3日も
かかって ゆでた
そうめん 1000人ぶん
わりばし
はいってきた
ドア
・あかい
そうめんや
みどりの
そうめんも
ときどき
はいっているよ
☆へや いっぱいの
ビニール・プール

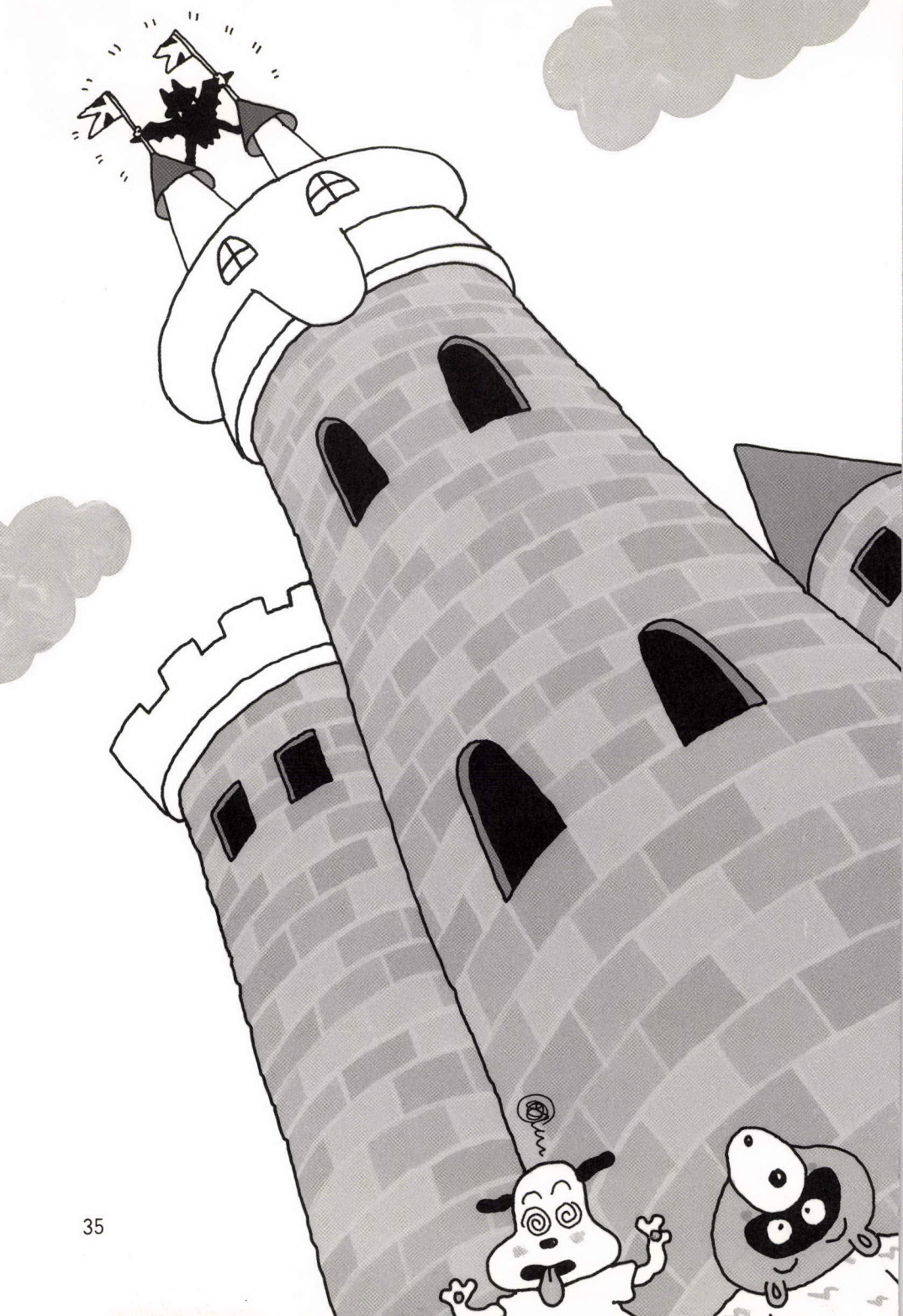
「みんなで　たっぷりと
ひやしそうめんを
たべてくれたまえ。
これが、つめたい
ばんごはんなのだよ。
ひっさつ、
〝そうめんの池（いけ）
じごく〟だっ！」

ドッボーン！
ビッシャーン！
「キャー、ぬるぬる　するわ。
おぼれちゃう。」
「ぐえーっ、べっちょり、
ニュルニュル　きもちわるーい。」
「フッフッフ。」
ふたたび、ドラチュッチュの
わらい声が　ひびきわたりました。

ドラチュッチュと　すみれちゃんの　あいだに
はいり、すみれちゃんの　手を　ひっぱって、
むちゅうで、ドアのなかに　とびこみました。

なんて しつこい、ドラチュッチュ。
カーテンの かげから、きばを ひからせ、
ちかくに いた、すみれちゃんに とびかかりました。
キャーッ！
すみれちゃんの ひめい。
「あっ、こっちに ドアが あるぞ。」
シマオが にげみちを みつけました。
「たすかった。はやく にげろっ。」
ポイポイは、こわいのも わすれて、

たべに こいって いうから、きたのよ。」
と、すみれちゃんが いいかえしました。
「そんな つよがりを いえるのも
いまのうちだぞ。フッフッフ、
ゾロリさまは、たしかに つめたい
ばんごはんを よういして、
まっておられる。
でも そのまえに、
ちを ドラ、チュッチュ、させてくれ〜。」

おしろのなかは、まっくらです。
てさぐりで すすむと、カーテンが ゆらり
ゆらりと ゆれて、月の ひかりが さしこんで
いる へやに でました。
「よく、ここまで きたな。ドラ、おまえたちの
ちを、チュッチュ してやる。」
「ドラチュッチュめ、また でたな。」
「あんたなんかに、ちを すわれて
たまるもんですか。ゾロリが ばんごはんを

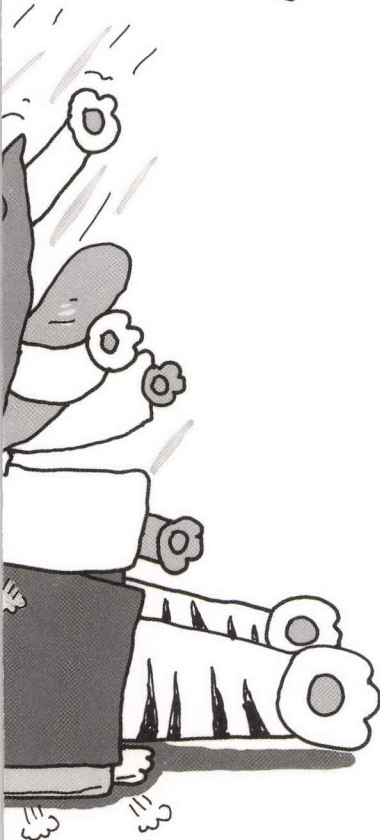
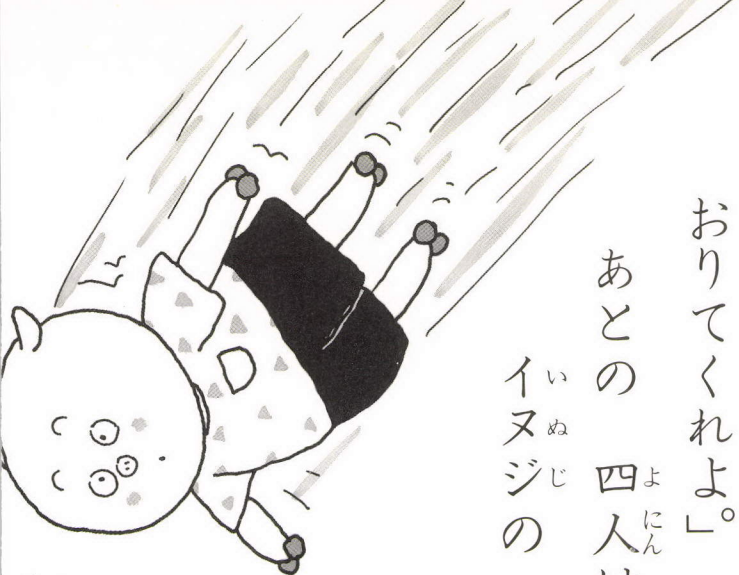
ドラチュッチュは、ぶきみな　わらい声を
のこして、すーっと　きえていきました。

ポイポイは、ばんごはんどころではありません。カチ　カチ　カチと、はを　ならして、ふるえるばかりです。
ガタガタ
ブルブル
たべたかったら、じぶんで　さがすんだな。くいしんぼうのイヌジくん。フッフッフッ。

「チュッチュと　ちを　すわれるなんて、いやだ。」
ポンチが　いいました。
かわいくて、きの　つよいところも　ある
すみれちゃんが、
「ドラチュッチュの　エッチ！」
と、イーダを　しました。
「ばんごはんは、どうなってるんだ！」
したじきのように　なりながらも、たべることを
わすれない　イヌジが、いいました。

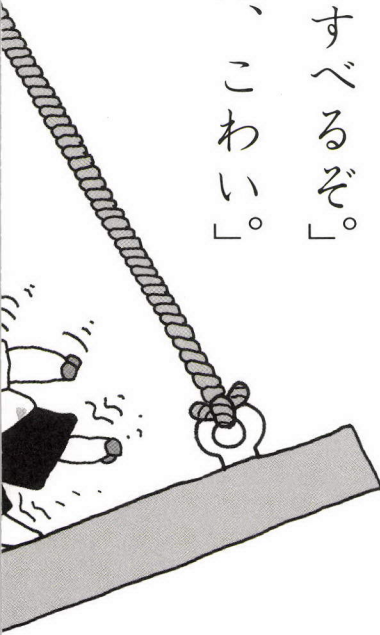
わしの　名まえは　ドラキュラの
いとこの　子どもの、ずーっと
ともだちの　ともだち、
ドラチュッチュだ。
ドラ、チュッチュと、
ちを　すわせてもらうから、
かくごしろ。

「フッフッフ、いかにも　そのとおりだ。
ばかな　ちびっ子　しょくん。」
空から　声が　きこえました。
「いったい　だれだっ!!」
みると、おしろの　てっぺんに、
マントを　ひるがえした　かいじんが、
たっています。
口もとから　白い　きばが
きらりと　のぞきました。

イヌジは、なんだか
したじきのように
ひらべったく　なって
しまいました。
「ごめん　ごめん。」
シマオが　あわてて　あやまりました。
「それより　みんな、どうやら　ぼくたちは
とじこめられたらしいな。」
と、ポイポイが　いったときです……。

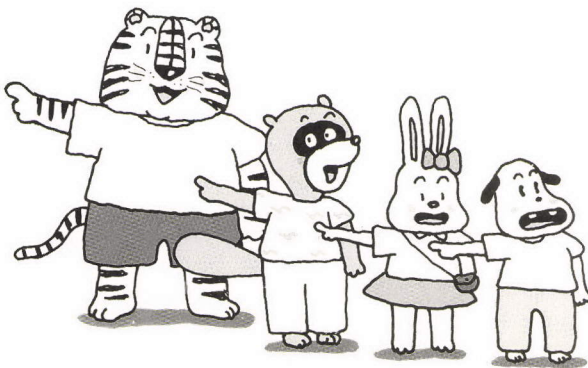
ドサッ！　ゴチン！

「おー、いてててよー。はやく　ぼくの　上から
おりてくれよ。」

あとの　四人は、お正月の　かがみもちのように、
イヌジの　上に　じゅんばんに　のっかって
いたのです。

と、みんなが
さけんだときには、
のぼりぼうのように
まっすぐ　たって
しまいました。
「あれ——」。
イヌジ、シマオ、ポンチ
すみれ、ポイポイの　じゅんで、おちていきます。

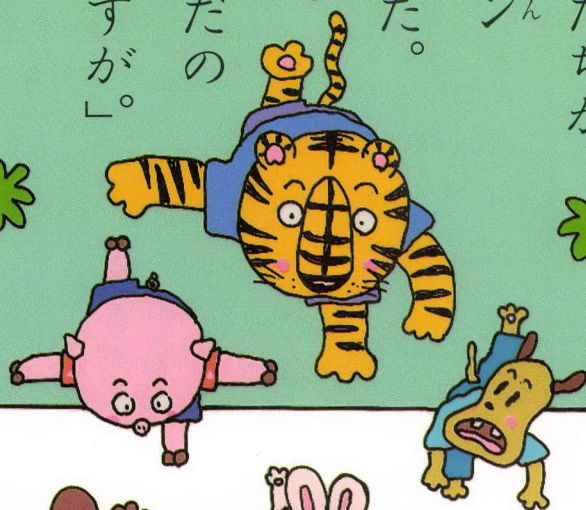
ゾロリ(ぞろり)じょうの　まわりは、おほりに
なっていて、はしが　かかっています。
ポイポイ(ぽいぽい)たちが　はしを　わたりはじめると、
ギリギリギリッ(ぎりぎりぎりっ)と、はしが　うごきだしました。
はしは、あっと　いうまに、すべり台(だい)の
ように　なって、
「うわー、すべるぞ。」
「いやーん、こわい。」

「……う、うん。」

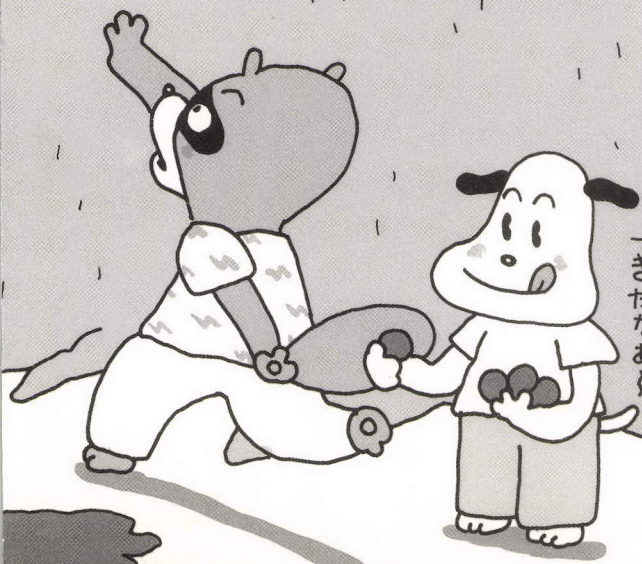
と、ポイポイは、じぶんに　いいきかせました。

「ねえ　ねえ　みんな。かえろうよ。」
「なに　いってるのよ、ポイポイ。
せっかく　ここまで
きたんだから、どうしても
ゾロリに　あって……。」
「すずしく　なるものを、ごちそう
してもらうんだ。」
ほかの　四人は、元気いっぱい
です。いくより　しかたありません。

ポイポイは、その〝おばけやしき〟
と いう ことばを きくと、
きゅうに こわく なって
きました。
それに、だんだん
うすぐらく なって きて、
いかにも おばけが
でそうな かんじです。

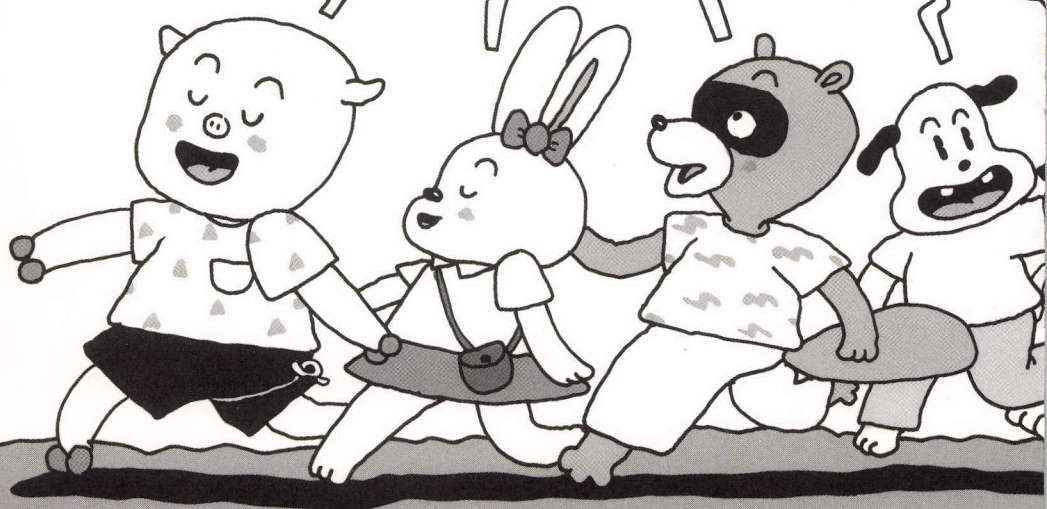
のはらの むこうに
でっかい おしろが
そびえています。
「うへー、なんだか
おばけやしきみたい。」
ポンチ（ぽんち）が いいました。

ポイポイたちは　むちゅうで
にげました。
どこを　どう　はしったか、わかりません。

ブ〜ン
なん百ぴきもの　ハチたちが
おこって、ブンブン
とんできました。
「ヒャーッ、えだの
かげに　ハチの　すが。」
「に、にげろー。」
ブブブ〜ン

みんなは　さっそく
足もとの　どろんこで、
どろまんじゅうを　つくると、
木の　えだに　ある　◎マーク
に　むかって、なげつけました。
ベチャ！　ドカ！　ブチャ！
おおあたり――。

みんなは、やっと　いっぽんすぎまで
たどりつきました。その、大きな　木には、
はりがみが　はってありました。

おおがま
けむしやま
いっぽん すぎ
へび じごく

ちびっこ しょくん
きみたちの あたまで
まよわず
いっぽんすぎ まで
これるかな
ゾロリ
こうもり どうくつ
カッパいけ

町はずれまで　くると、
たてふだが　たっています。

くいしんぼうの　イヌジも　さんせいします。

「いこうよ、いこうよ。すずしく　なる
ごちそうって、どんなものかなあ。」

「やっぱり　そりゃあ。」

「アイスクリームでは　ないだろうか。」

「なんだか、たのしみに　なってきたわ。」

こうして、よいこの　みんなは、ゾロリじょうへ
でかけることに
なりました。

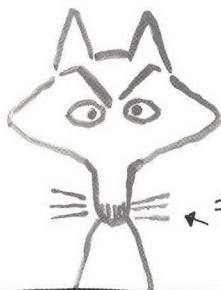
いるのなら、ぼくらが　いかなきゃ
がっかり　するだろうなあ。」
からだは
大きいけれど、
どこか　ひとの
いいところのある
シマオが　いいました。
「それも　そうだよね。ぼく　いってみるよ。」
ポイポイは　いくことに　きめました。

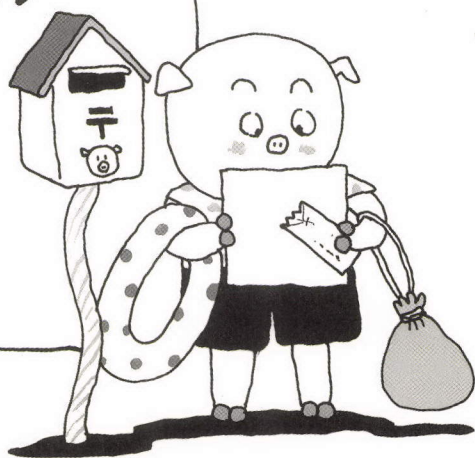
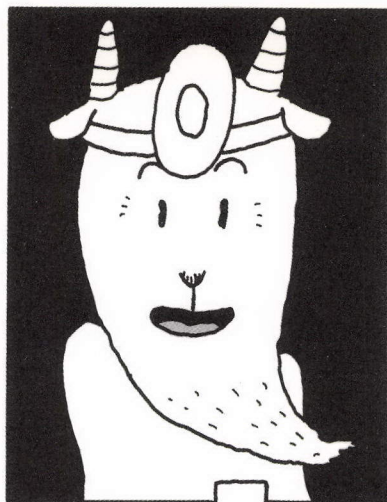
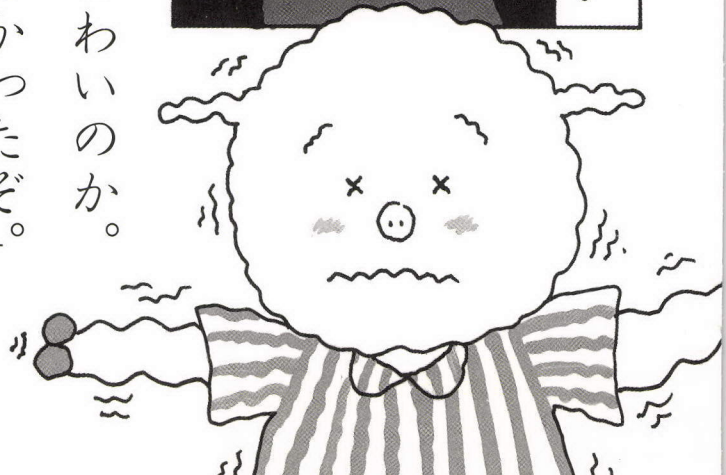
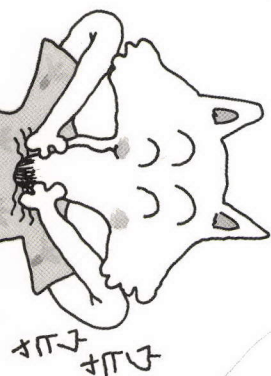
ポイポイは、　ともだちの　とらの　シマオ、いぬの
イヌジ、たぬきの　ポンチ、うさぎの　すみれちゃんに
手がみを　みせて、そうだんしました。
「なんだか、あやしいなあ。」
ポンチが　口を　とがらせました。
「そうよ。ゾロリったら、まえには　ゾロコ先生に
ばけて、だましたことも　あったしね。」
すみれちゃんも　いいます。
「けどさ、ほんとに　わるかったと　おもって、

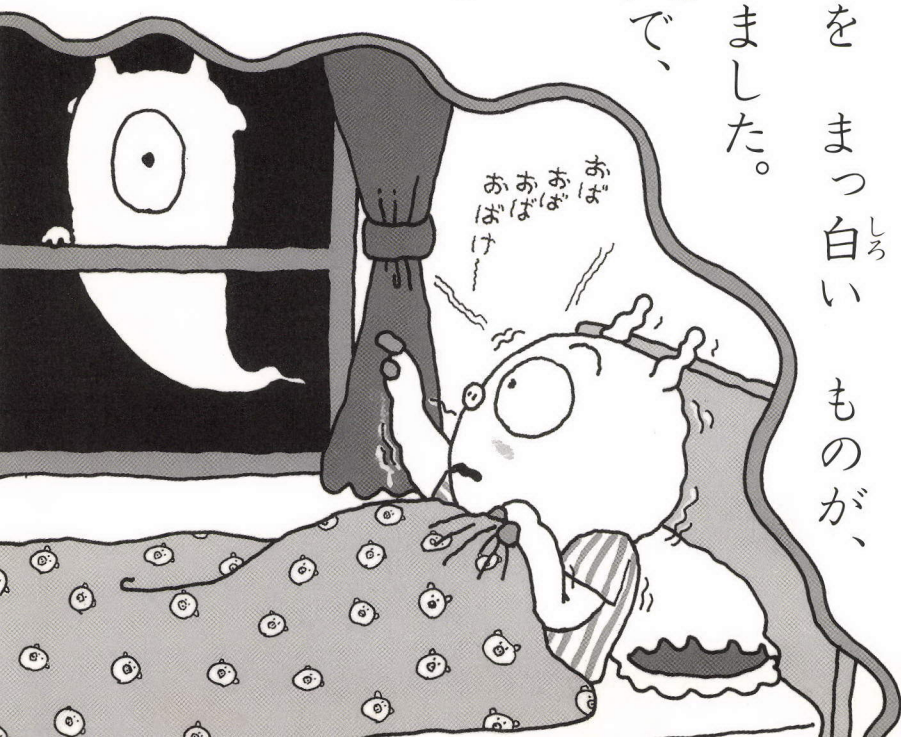
わるかった。それで、こんばん
ばんごはんを たべに きてくれ。
すずしくなる、ごちそうを
だしてやるぞ。
ひとりでくるのが、こわかったら
ともだちをつれて きてもいいぜ。

ポイポイへ

ゾロリさま
より

↖キリッと
かっこいい
わたし

さて、たのしい 夏(なつ)やすみに はいって――。
ポイポイが プールから かえって
くると、手(て)がみが とどいていました。

やあやあ、
まい日(にち)、あつい日(ひ)がつづくが
げんき だろうな。
おれさまも おげんきです。
いまでの ことは おれさまが

「しめしめ、ポイポイは　おばけが　こわいのか。
ウフウフ　こいつは　いいことが　わかったぞ。」
ゾロリは　にやりと　わらいました。
なんだか　わるい　よ　か　ん！

じつは　それは、となりの　うちの　おばさんが
きゅうに　びょうきに　なって、おうしんに　きて
くれた、やぎひげ先生だったのです。
そして、とうさんと　かあさんは、かんびょうに
いっていたのでした。
でも　それを、ポイポイは　おばけを　みたと、
しんじてしまったのです。
もう　二どと、あんな　こわい　おもいは、
したく　ありませんでした。

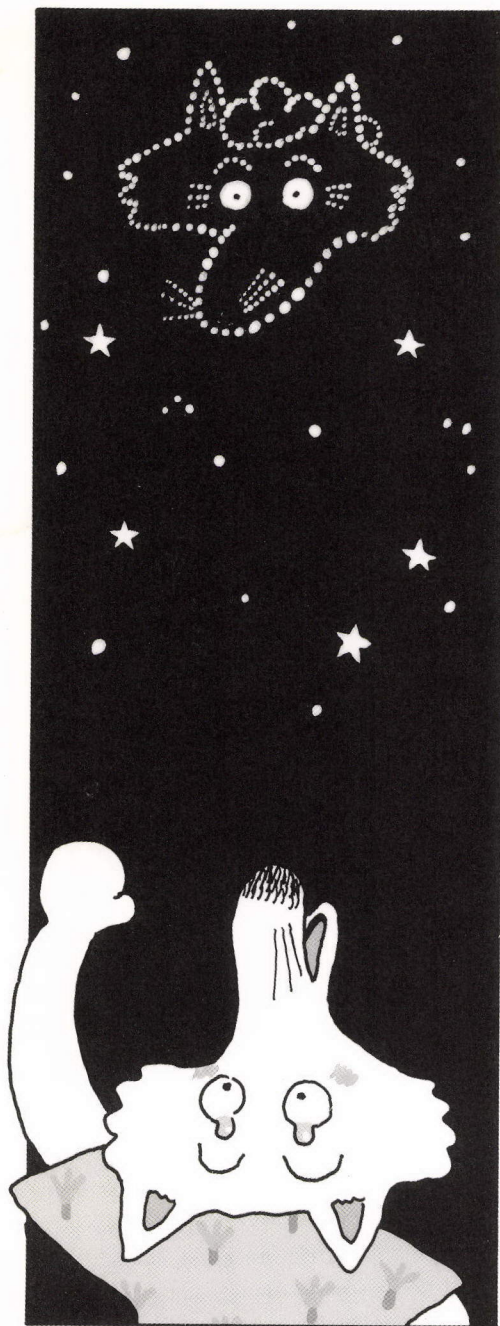
くらやみのなかで、ポイポイが　しくしく
ないていると、まどの　そとを　まっ白い　ものが、
ふわり　ふわりと、よこぎりました。
そして　おそろしげな　声で、
「わしを　よんだかね～」。
と、ガタガタ、まどガラスを
ゆさぶりました。
でっかい　目だまが、
ぎらりと　ひかりました。

まよなかに　なるのを　まって、ゾロリは
ポイポイの　いえまで、はしって　いきました。
「うん、これだよ。なになに……。」

おばけが　ぼくの　そばに　二どと　ぜったいに
でないように　してください、
ポイポイ

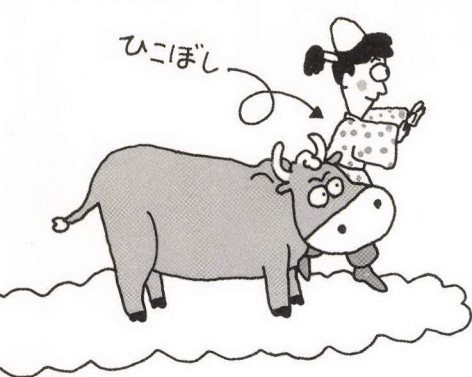
ポイポイは　ようちえんの　とき、
おばけに　あったことが　あるのです。
よなかに　目が　さめると、とうさんも
かあさんも　いませんでした。

なにを　おねがいしたのか、
すぐに　わかるぞ。ウヒウヒ。」
さあ、もう　ゾロリは、
ポイポイの　かいた
たんざくを　みたくて
たまりません。

「……でもさ、ポイポイのやつ、いったい　なにを
おねがいしたんだろう。
おねしょを　しませんように　かな？
ママの　おっぱいを　のみたい　かしらん？
……ん、まてよ。」
ゾロリの　目が、
きらりと　ひかりました。
「そうだ、あいつの
かいた　たんざくを　よめば、

くせして、ずいぶん へたくそな 字。
「ママー、みててね。きっと ほうれんそうマンを
やっつけてみせるからね――。」
ゾロリは ほし空に ちかいました。

ねがいごとを　たんざくに　かいて、ささのはに
つるすと、その　ねがいが　かなうと　いわれています。
ゾロリも　たんざくに、ねがいごとを　かきました。

にくいポイポイを　やっつけるには
どうしたら　いいか　おしえてくれよ
おほしさま　たのんだぜ　ゾロリ

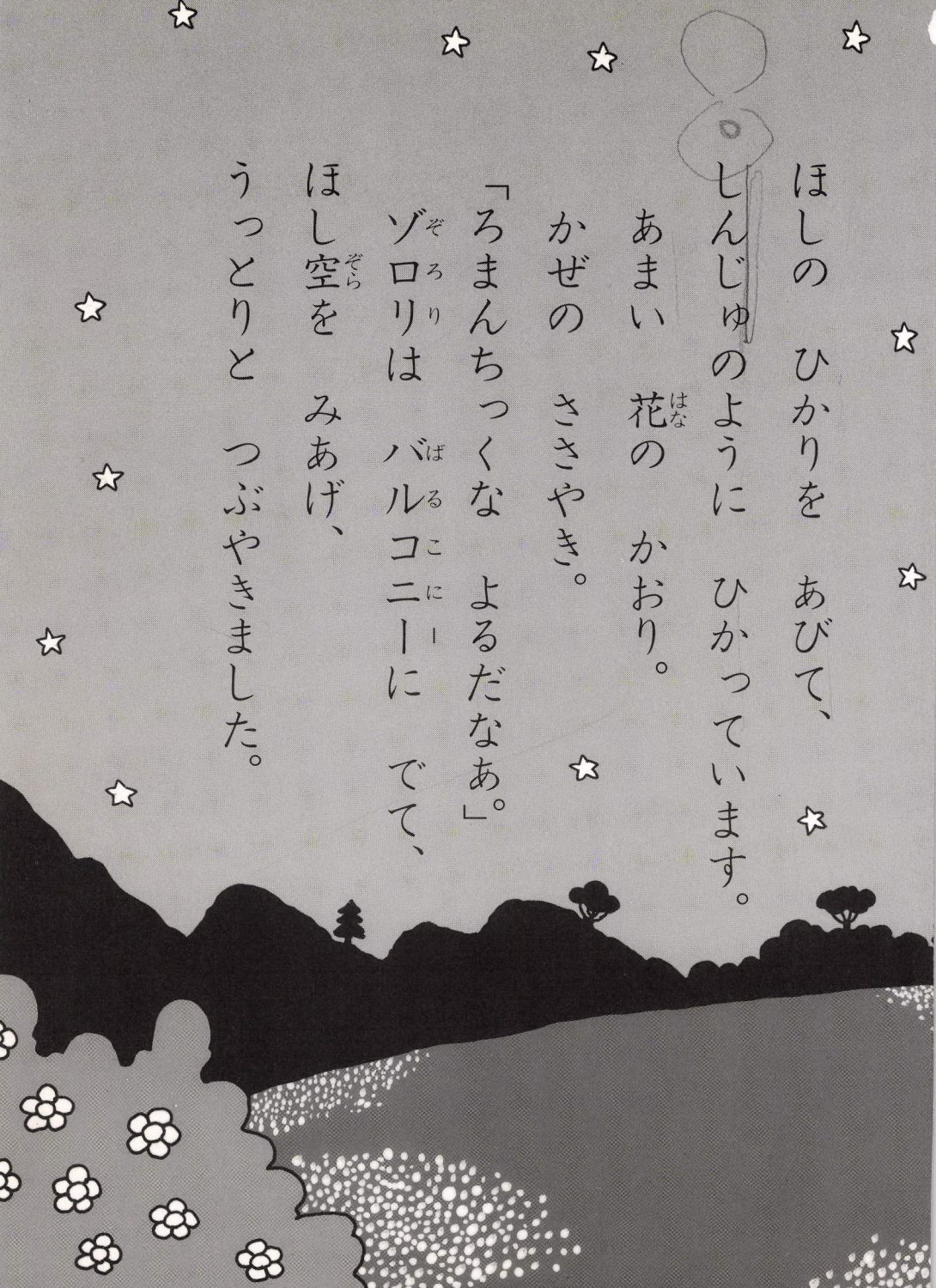
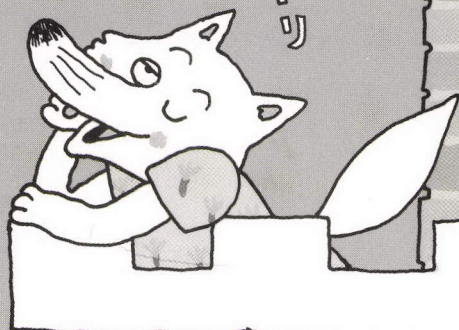
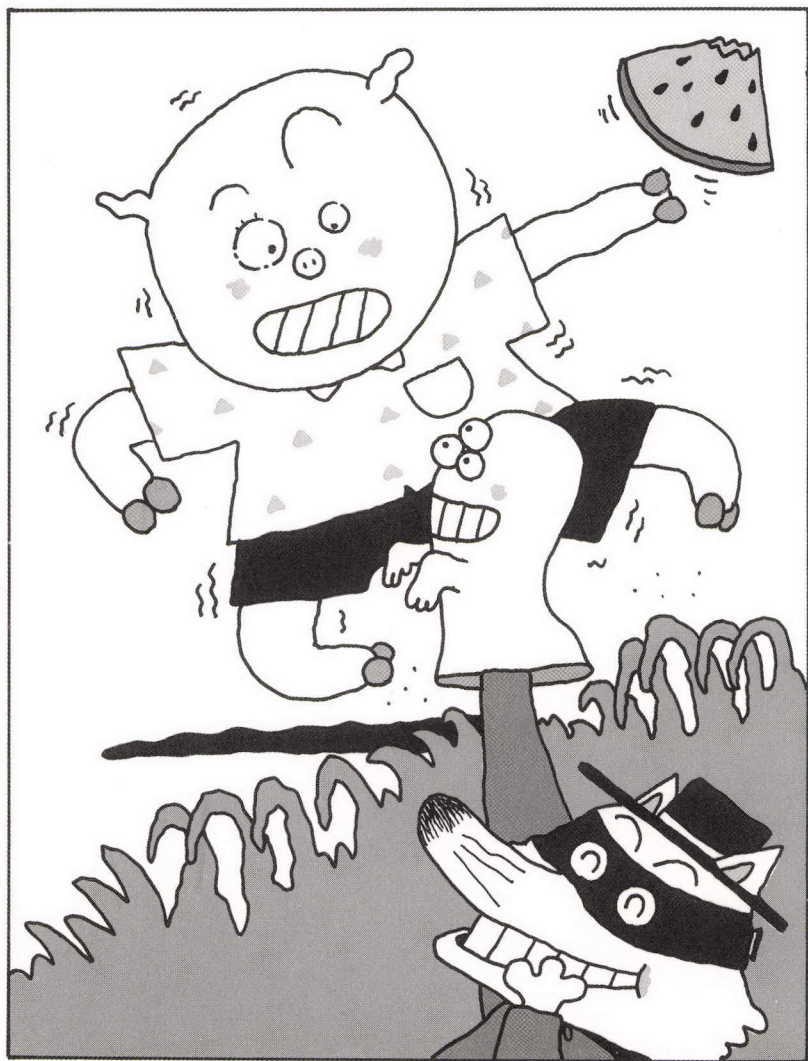
うーん。なんて　りっぱな　おねがいでしょう。
それに　まあ、ゾロリったら、百さいの　おとなの

ひこぼし

おりひめ

「そうだ　そうだ。うたって　いる
ばあいじゃ　なかったんだ。はやく
おほしさまに　ねがいごと　しなくっちゃ。」

きょうは　七月七日。
たなばたさまの　日です。一年に
いちど、おりひめと　ひこぼしが
あえる　日です。

あらら、　これで　ロマンティックな
うたの　つもりかしら。

ほしの　ひかりを　あびて、
しんじゅのように　ひかっています。
あまい　花の　かおり。
かぜの　ささやき。
「ろまんちっくな　よるだなあ。」
ゾロリは　バルコニーに　でて、
ほし空を　みあげ、
うっとりと　つぶやきました。

よぞらには、だきしめたく
なるような　きれいな　おほしさま。
のはらの　白い　花たちは、

ほうれんそうマンのおばけやしき

みづしま志穂 さく ★ 原 ゆたか え

ほうれんそうマンの
おばけやしき
みづしま志穂 さく★原 ゆたか え
キャ～